

群 教 セ	G11 - 03
	令6.287集
	学級活動

互いのよさを認め合い、協力して学級をよりよくしようとする児童の育成

— 「学級パワー」を生かした話し合い活動を通して—

特別研修員 鹿内 美緒

I 研究テーマ設定の理由

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編」では、「特別活動は、『（中略）互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する』ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動である」と述べられており、集団をよりよいものにするために自他のよさを生かしながら問題解決に取り組むことができる力の必要性が指摘されている。

本学級の児童は、友達のよさを認めたり、学級の課題に目を向けそれを自分事として考えたり、学級の一員として協力して何かに取り組んだりすることに課題が見られた。また、話し合いについては、意見を言うことに恥ずかしさや怖さを感じていたり、多数決や一部の児童の意見のみで話し合いが終わったりしてしまっていた。これは、児童が友達のよさや学級の課題を意識する場が少ないと、学級の一員であるという意識が低いこと、そして話し合いの際に意見を出しにくい雰囲気があることが原因であると考えられる。このような児童にとっては、友達のよさや学級の課題を考える場を設けたり、全員が参加しやすい雰囲気の話し合いを行ったりする経験を積み重ねていくことが大切であると考える。

そこで、「学級パワー」を議題にした話し合い活動を通して、互いのよさを認め合い、協力して学級をよりよくする児童を育成することを研究のテーマとして設定した。また、本研究では学級活動の内容の「（1）学級や学校における生活づくりへの参画」に限定する。

II 研究内容

1 研究構想図



2 研究上の手立て

児童が互いのよさを認め合い、協力して学級をよりよくしようとするようになるために、次の三つの手立てを考えた。

手立て1 「学級パワー」の活用

「学級パワー」とは、研究協力校で取り組んでいる活動である。学級に対する意識調査（16項目のアンケート）を実施し、その結果から学級をよりよくするために必要な九つの項目を決定し、レーダーチャート図に表す。「学級パワー」を活用すると児童の学級に対する意識が数値化されるので、児童自ら学級の課題に気付くことができる。そして、その課題についての話し合いを行うことで、学級をよりよくしようとする態度を育てることへつなげていく。

手立て2 話合いを活発に行うための環境づくり

「クラス会議」の手法を参考に二つのことを行う。一つ目は場の工夫であり、椅子だけを円にした形で話し合いをする。二つ目は話し合いに入る前に、コンプリメントの交換を行う。コンプリメントの交換とは、友達にしてもらって嬉しかったことや、友達の頑張っていたことなどを全員が発表する活動である。そのとき、友達のよさに目を向けながら肯定的に意見を受け入れていくことで、話しやすい雰囲気をつくることができ、活発な話し合いにつなげることができると考える。なお、話し合う際にはトーキングオブジェクトとしてぬいぐるみを用いる。

手立て3 振り返り時の問い合わせ

話し合いの終末、児童が振り返りを発表する場面で教師が問い合わせを行う。児童が友達への称賛を発表した際に「言われてどんな気持ちになったか」などと問い合わせすることで、児童同士をつなげ双方が認められたという気持ちを味わうことができると考える。

III 実践例

1 議題名 「『学級パワー』アップ大作戦！」 学級活動（1）（第3学年・2学期）

2 本議題について

本議題は、「学級パワー」を高めるために学級として何ができるかについて話し合うものである。そこで、学級の課題解決に向けて学級で取り組む活動を考えることは、集団の一員であることを一人一人が自覚し、協力して学級をよりよくしようとのできる児童を育成するきっかけになる。

以上のような考え方から、本議題では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 知識及び技能 学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付けるようにする。
	(2) 思考力、判断力、表現力等 学級や学校の生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができるようする。
	(3) 学びに向かう力、人間性等 生活上の諸問題の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。
評価規準	(1) よりよい生活を築くための知識・技能 よりよい学級をつくるために、他者と協働して取り組むことの大切さや、意見の比べ方やまとめ方を理解し、活動の方法を身に付けている。
	(2) 集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 よりよい学級をつくるために、問題を発見し、解決方法について理由などを比べながら合意形成を図り、協力し合って実践している。

	(3) 主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 よりよい学級をつくるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己の考えを生かし、役割を果たして集団生活に取り組もうとしている。
過程	主な学習活動
事前の活動	<ul style="list-style-type: none"> 学級に対しての意識調査を行う。 調査結果を分析し、学級で高めるべきパワーを決定する。 高めるべきパワーに対して学級として何ができるか、自分の考えをもちワークシートに記入する。
本時の活動	<ul style="list-style-type: none"> 友達のよさを全員が発表する。 マニュアルを用いながら、話し合い活動を行う。 議題について話し合い、まとめる場面では合意形成を図ることができるようになる。
事後の活動	<ul style="list-style-type: none"> 決めた取組が行われているか、適宜確認をする。 二週間実践し、終わった後に振り返りシートで事後の振り返りを行う。

3 授業の実際

(1) 事前の活動 手立て1 「学級パワー」の活用

学級に対しての意識調査を行い、結果をレーダーチャートに示した（図1）。その結果を基にどのパワーを高めていきたいかの話し合いを行い、「認め合いパワー」に決定した。その後「なぜ認め合いパワーが高いのか」「認め合いパワーを高めるために学級として何ができるか」を考える時間を設け、一人一人が意見をもって話し合いに臨めるようにした。普段発表することが苦手な児童も意見を書くことができており、学級の課題に対して全員がしっかりとと考えている様子が見られた。司会チームについては、司会チームと教師で役割を分担したり、話し合いの流れを確認したりした。また、話し合いのめあても決定した。

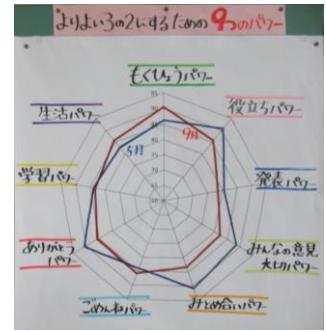


図1 学級パワー

(2) 本時の活動

① 手立て2 話合いを活発に行うための環境づくり

全員が話しやすい話し合いの形態として椅子だけを用いた円の形をつくった。その後、話し合いに入る前の交流として、友達にしてもらって嬉しかったことや、友達の頑張っていたことなどを一人ずつ発表するコンプリメントの交換を行った。「○○さんが、算数の時間に分からないところを教えてくれて嬉しかったです」「みんなが運動会のダンスの練習を一生懸命頑張っていてすごいと思いました」などの発表に対し、児童がハンドサインを用いて「いいね！」や「同じ！」などと一人一人に反応しながら聞いていた。それにより、意見を言った際に友達に受け入れてもらいながら明るく話し合うことができる雰囲気がつくられ、多くの児童が話し合いの場面でも意見を言うことができた。

② 手立て3 振り返り時の問い合わせ

話し合いの終末では話し合いに対しての振り返りを行った。司会に指名された人が発表していく中で、友達への称賛については教師が対象児童に「それを聞いてどう思うか」を問い合わせた（図2）。問い合わせに対しては嬉しそうな表情で答える児童が多くいた。児童同士の言葉をつなげることは、友達のよさを見付けられた、友達に認めてもらったなどというように、お互いが認められたという気持ちをもつことができると感じた。

S1	司会の二人が大きな声で司会をしていたので、すごいと思いました。次に私がやるととも二人みたいに頑張りたいです。
T	それを聞いて、どう思いましたか。
S2	とても嬉しいです。 ありがとうございます。（S1へ）
T	S1さんも友達のよいところを見付けられて素敵ですね。

図2 振り返り時の問い合わせ

(3) 事後の活動

話合いでは、学級全員のよさを書けるノート（図3）を用意してみんなで書いていくことが決まった。決めたことを実行するために「全員に書けるように頑張る！」と意識して書いている姿や、「今日は、全員1枚は書こう」とみんなに呼び掛ける姿が見られた。また、自分のページを嬉しそうに見てしたり、書いてもらったから自分も書こうとしたりする様子も見られた。活動後の振り返りシートには、「自分のよいところを見付けてもらうと、自分のよいところを認められるようになった」や、「一人一人が自信をもてるようになった気がする」などと記述している児童が多くかった。

(4) 考察

手立て1として、学級の黒板にある1日のめあてを書くスペースに「発表パワーを高めるために、ハンドサインを使って授業を受けよう」と書く児童の姿が見られるようになった。児童が生活の中で「○○パワー」と口にするほど浸透したことから、「学級パワー」を活用したことは、学級をよりよくしようとする態度を育てるためには有効であった。学級パワーを提示し学級の課題について考えることで、よりよい学級がどういうものなのかが児童の中で明確になるだけでなく、全員でそれを共有することができたので、協力して学級をよりよくしてこうとする態度が育成できたと考えられる。

手立て2として、コンプリメントの交換の場で全員が発表できたことに学級全体で喜びを感じていた。また、ハンドサインを使ったり拍手をしたりして友達の話を笑顔で肯定的に聞いている児童が多くかった。話合いではトーキングオブジェクトとしてぬいぐるみを用いたことで、「話す・聞く」の役割が明確となり、聞いてもらえる環境の中で話せるので、多くの児童が自分の意見を言うことができた。これらのことから環境づくりをしたことは、自分の意見を肯定的に受け止めてくれるであろうという安心感をもたせたり、友達の話をしっかりと聞こうという態度を作ったりと、児童一人一人が意見を言いやすい雰囲気づくりをするためには有効であったと考える。

手立て3として、児童同士の振り返りをつなげたことでお互いの嬉しそうな表情が見られた。振り返りの場面は発表して終わりとなってしまうことが多いが、教師による問い合わせで児童同士をつなぐことで、互いのよさに気付き、認め合うこともできると考える。

IV 研究のまとめ

1 成果

「学級パワー」から学級の課題を見いだし、それを高めるための具体的な取組を全員で話し合って決めたことで、学級としての結び付きが強くなり、日常生活の中で「みんなで頑張ろう」という姿勢が多く見られるようになった。また、実践後の振り返りでは「これからも学級パワーを高めていくためにクラスのみんなで頑張りたい」「もっともっとよいクラスにしたい」などの意見があり、このことからも協力して学級をよりよくしようとする意欲を感じることができた。

また、環境づくりや教師による問い合わせを行ったことで、相手の思いや考えを大切にしながら話合いを進める姿が見られた。その姿から、児童がよさを認め合うことの価値を感じることにつながったと考える。

2 課題

活動を通して互いのよさを認め合い、協力して学級をよりよくしようとする児童の姿を見ることができた。今後も教師が児童の実践をよく観察し必要なときに言葉を掛けることで、自分たちで決めた活動を継続して行うことにつなげていくことが必要である。そして、学級をよりよくしようとする力を更に育んでいくことが大切であると考える。

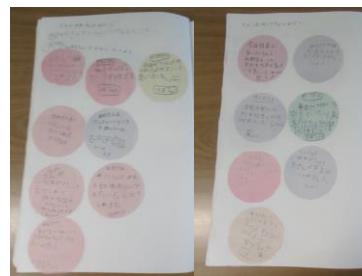


図3 よいところノート